

幼稚園における絵画製作の指導



司会 坂元彦太郎
協議メンバー 林 健造・熊本高工・津守 真
外 参会者

〔林〕 私は父兄のひとりなので、自分の娘が幼稚園でやっているのを見ていると、あの中で一番創造的でないのはうちの娘ではないか、という気がします。さて、この数日、私はその四才になる女児をつれて幼稚園への送り迎えをしております。電車には二十分位乗るのですが、非常に混んでいきます。子どもは小さくて、一メートルもないと思うほどで、混み合った中では、人のひざが見えるだけなのです。彼女はこの群衆の中で何を考え、何を自己教訓としているのでしょうか。四つほどある駅名をすぐに覚えてしまったのです。「しいな町」には非常に魅力をもっていて、この名前をきくとニコニコとして、池袋で降りてホッとします。たまに座ることができると、始めは窓の外を見ているが、しばらくすると、あきてしまつてぐずり出す。そこで私はポケットから紙とボールペンをとり出して与えておく。そうすれば、だまって描きながら池袋までもつです。

ある日、突然びっくりした顔で、「パパ、今日、しいな町なくな

っちゃったね」と言うのです。それは、紙に一生けんめいに描いていたので気づかなかつたのですが、ここに、やはり、びっくりする子どもの世界、「しいな町」がなくなつた、と考える、このような子どもの発想、疑問、表現の形があります。

もう一つ、私がびっくりした事は、満員電車から降りる時、彼女は非常にあわてるのです。私など、混んでいる時は、皆が降りるのだから、皆降りてしまつてからゆつくりでよい、と思つていますが、そうすると、彼女は群衆の出た後を一生けんめいに追いかけるのです。群衆をかたまりと感じ、みんなどこかに行つてしまふと考えるのです。

子どもは表現に特色があります。これを、先生は知らねばなりません。これをスカッと表現できねばならぬと思ひます。絵画製作は安全弁であります。どうしようもない満員電車の中で、絵を描くことによつて他の世界にぬけ出ることが出来るのです。

〔熊本〕 私は幼児教育の専門家ではないので、満足が与えられま

すかどうか。十年来、絵の方の研究所で仕事をし、現在では小・中・高の生徒・浪人・大学生と種々雑多な人にいろいろな学校で教えている典型的職人教師です。いい職人もいないと困りますから。先日もある幼稚園で教えたのですが、かわいい子がいて模様を描いていました。「きれいだねえ」とか言っていました。その日、父親が来ました。「うちの子はどうですか」と言うので、スケッチブックをとりあげ、バラバラとみたら、飛行機や自動車を描いている。だから「女の子にしては珍しいですね」と言ったら、「いや、女の子ではないです」と言うのです。弱ったなあ——と思ひましてね。髪の毛をカールしているんですよ。てっきり女の児と思っているような、頼りない職人ではありますが……。

私どもの仲間でいろいろ幼児の美術教育が盛んになり、戦前の訓練主義的折り紙、ぬりえがみられなくなりました。今では、大きな紙にたっぷり、えのぐを使い、或るいは、粘土で大きなものをつくったりしています。これは多くの先覚者の努力のためものだろうと思います。美術教育の集りなどに出席すると、関西のかたはどちらかと言えば物量を投じてやっておられます。先生方の服装も立派で、みわたしたところ帽子をかぶっている人が多いですね。何か豊かに外側が立派にできていると周郷先生がおっしゃったが、僕もその通りだと思ひます。どうも、東京をはきんで北と西では物の感じ方が違ふようです。東北の美術教育は、形よりも内容であるらしく、非常に貧し気な栄養失調のような傾向があり、色彩も極度に制限されている傾向があるようです。いずれにしても、全国各地の集会を拝見していると、昔の訓練主義的なものは影をひそめているようです。

しかし、形だけが新しいのはいけなくて、内容が必要なのです。形をつかむと同時に精神をつかむことが大切であります。しかし、形に対する見方というものが、指導者として必要ではないかと思ひます。あるものを展示する場合でも、他人によくわかるように並べられる場合とそうでない場合があります。広く、デザインと言つていますが、物の置き方、並べ方、色の使い方など、いわゆる私共が造形といつているその中から、何を使うか、ということが指導者としては必要ではないでしょうか。

この頃では少なくなりましたが、まだ、ある地域に行くと先生が、「鯉のぼり」とか「手を洗う」絵を描いて掲示してあります。これは、なみだぐましいことであるが、どうも幼稚園の雰囲気を感じているのではないか、という気がします。昔なら、いわゆる教訓をきれいに掲げ、そのとなりには「まっすぐすわりましょう」という写真や、背骨の絵かなにか、気味の悪いものが張つてありましたね。そういうものを平気で掲示する神経というのは、われわれ造形職人としてはちょっと考えてしまうのですが、それにはどうしたらよいか、そういう勉強を必要とするなら、どんなふうにしたらよいか、ということも考へるべき問題になるでしょう。

〔津守〕 私自身、えをかいたり、つくったりすることは不得手でありまして、小さいときから絵をかくと丙ときまっていますし、人からえがうまいとほめられたことがあります。ですから、絵画製作というようなことについて、絵画や製作の立場からおはなしする資格もないのです。そこで、絵の専門家でない私は、幼児教育の全体の立場から絵画製作の問題を考へたいと思ひます。

この六月の研究会では、私は例年、保育科の学生さんに手伝っていただいて資料をとってもらい、それをもとにしてお話しすることになっているのですが、今年も幼児が絵画と製作をしているところを観察していただきました。子どもがかいたりつくったりしているところをみますと、そこではえをかくことやものをつくることだけをしているのではないことがわかります。子どもはつくったりかいたりしながら、お互いにしゃべったりつきあったりすることが非常に多いのです。そしておもしろいことには、そういう社会的な交渉の中で、かくものの内容もかわってきて、最初考えていたのとは違ったものができてゆくのです。もしも子どもがあちちについて友だちと話し、こつちに來て先生と話しようというところがなかったら、もしも子どもが自由に動いていないで、言われたところにじっと座って、言われたものをかいているだけだとしたら、子どもの絵や製作はおもしろくなくなってしまうだろうと思いました。次の観察記録の一例をみてください。

部屋の一角の小さな移動黒板に男児Nが形のはっきりしない絵をかいていて、そのまわりを男児J、女児M、女児Kなどがとりにかこんでいる。

N 「お化けがここにいるんだ」

J 「お化けやしき？」

N 「ただのお化け屋敷だよ」

J 「ふうん」

N が今まで描いていたものを消して長細い丸のようなものを描く。

N 「くじら」

J 「ぼく、きのお化けえんとつのところにいる夢みたよ」

N 「うそ」

J 「ほんと」

N 「えんとつの中？」

J 「ううん。えんとつのすぐそばにいるの」

M 「こわかったでしょう」

J 「ううん」

N 「あのね、このまえね、インディアンを夢みたよ。こんなインディアン」と言いながらいびつな丸形のものを描くが、すぐその上からぐしゃぐしゃに描きつぶしてしまう。

J 「それへびでしょう」

N 「どくへび」

J 「うわあ、どくへびだ、コブラだ、うわあどくへびこわいよ」と言って大げさに足をどたどたふみならす。

M 「コブラって毒もっているよ」

N 「え？」

M 「コブラって毒もってるよ」

N 「ん？」

M 「コブラって毒もってるって言ったの」

J 「ぼく少年ケニア見てるよ」

N 「毎日？」

J 「毎日じゃあないけど」「少年探偵団もみるよ」
N、何やらわけのわからないものを描く。

「どくへびだあ、うわあー、こわいよう」

と書いてそのまま走って行ってしまふ。

このように一人の子どもが黒板に描く絵を他の三人の子どもがみており、その絵によっておしゃべりが発展し、またそのおしゃべりによって次の絵が生れてゆく過程をみる事ができたと思います。

黒板は変化しやすい材料ですが、砂や積木の場合も同じような例をいくらでもみることが出来ます。それですから、子どもの創意を生かすには、お互いに会話をかわし、好きなことをいえるようなふんい気がつくられていなければならず、自由に動きまわって自分で活動を選択する自由がなければならぬと思います。そして、子どもはかかねばならぬかかぬかではなくて、かくこと、つくることの中に、熱心に仕事をする対象を見出してはいるのです。だから、かいたりつくったりする過程を大切にしなければなりません。このことから、かきたいな、つくりたいなという気持が湧いてくるので、このつくりたいな、かきたいなという意欲を起すことが絵画製作の指導でもっともたいせつなことです。そしてこの意欲を起すことができれば、あとは子ども自身の手にゆだねて、どのように発展してゆくかを見守っていればよいのだと思います。

それでは教師の助言はその中でどのような位置をもっているでしょうか。

教師は何か子どもに注意を与えたり、積極的な指示を与えないと教育をしていかないかのような錯覚におちいりやすいものです。しかしそれは誤りです。自由な活動の中におかれている子どもは、お互い同志批判をすることが非常に多いものです。そして子ども同志

にまかされた批判は子ども自身の判断で取捨選択してとり上げてゆきます。しかし教師の批判には、子ども自身の判断で選択の余地がありません。ここでは子どもは教師の権威を感じています。

子ども同志で批判する例を示しましょう。

4才児、二つつながった机をかこんで七、八人の女の子がそれぞれ思いおもいに絵をかいている。

H「ママなの」と言って描けた絵を先生のところにもってきた。

先生はそれに「五月二十日、ママ」と書きこんだ。それをのぞきこんでいたYは、「このママお洋服着てないわ」と大声で言う。画面一面に大きくかかれたママの顔には、洋服を着せる余白がほとんどなかった。Hはだまって絵をみている。少しして、

H「ママはお洋服着てないの、はだかなんですもん……」という。

Y「あら、風邪ひいちゃうわ」との声に、みんなわあーと大笑いする。その絵はそのまま終ったが、次にHのかいた絵には着物を着た和服姿の母の絵ができた。

ここにはごく自然に子どもの批判がとり上げられているのを見ることが出来ます。

教師の批判は積極的に子どもの意欲を支え、眼をひろげるものになければなりません。

教師の助言の例を次に示してみましょう。

先生が紙でつくったおすもうさんを土俵でくませ、とんとんたたいていると、お部屋で遊んでいる子どもたちが集まってくる。

先生「おもしろいでしょう。おすもうさんもっとたくさんにしましょうね」

みんな「つくる、つくる」

先生は画用紙でつくったおすもうさんをめいめい二枚ずつ渡す。子どもたちはクレヨンを出してきてぬる。Kは顔もからだも青にぬる。となりにすわっているしげるも青にぬる。

先生「おすもうさんはだかんぼさんよ」

M「あたし、そんならはだいろにしよう」

M、A、Yもそれぞれ、赤、紫、緑とぬっている。おすもうさんはこの紙土俵でくんでみんなが土俵をたたきあって遊んだ。

先生が「おすもうさんはだかんぼよ」というとき、そこには命令的指示ははたらいていません。ただ事実だけを指摘して、それをどのようにうけとるかはその子どもの選択にまかしてあります。

教師の役割として重要なことの一つに、よい思いつきのときにはめてあげるといふことがあります。そうでないと隣の子のまねで終ってしまう場合も多くあらわれます。「幼児の教育」誌の六月号がこの研究会のための特輯号になっていますが、この中で村井先生が適切なことを言っておられますので引用してみましよう。

「同じ絵ばかり描く子にも、また、あの絵かという眼で見ないで、永い眼でみてやろうと思う。同じようでも、どこか少しずつ違ったものが、また新しくつけ加わったものが、いつか出てくる。このチャンスを見逃さずほめてやりたい。このチャンスが秘訣ではないかと思う。」(幼児の教育、六十巻六号、四十五頁)

たいへん適切な助言だと思います。最後に、私はもう一言だけ、絵画製作が幼稚園教育の中で果す役割について指摘したいと思います。

幼児の親は子どもの絵に大へん夢中になる傾向があります。それは学校にゆけば学校の成績にだけ夢中になる親の心理と同じです。それはどこからくるかというと、現代人は何か大きな社会組織の一部分にならないと不安を感じるということと関係があるのだと思います。親は何とかして自分の子どもを将来安定した職につかせたいと思う。そのためにはよい大学にいれ、そのためにはよい高校、中学と一つの鎖になっているのです。だから幼児の絵はたんに一枚の幼児の絵ではなく、将来への道につながるものともいえるので、親は子どもがどんなに上手な絵をかかかということに夢中になりまます。幼児時代にはまだ勉強らしいものがはじまらないので、だれの眼にも見える評価の材料としては絵というようなものがきわめて便利なのだと言えます。私はこう申し上げて、このような親の態度を責めるつもりはありません。それは現代社会の中での一つの必然なのであって、このような親の心理を理解した上で、教育的対策を考えてゆくべき問題であります。しかし子どもの絵や製作は、絵や製作そのものとして意義をもつばかりでなく、絵や製作に際して子どもがそこで熱中して仕事をする態度が重要なのであることを重ねて強調したいと思います。でき上った結果がどのようなものであろうとも、そのことに熱中し、そこで考え工夫し発見してゆくことがたいせつなのです。そしてこのことのために子どもが自由に活動することのできるじゅうぶんな時間と空間と、友だち同志の交渉と教師の適切な助言とが必要なのです。

△坂元V いろいろな方面の議題はございますが、子どもの幼稚園に関することはあとまわしにして、一般的なことについて議論し

ていただきたいと思えます。非常に具体的な話からはじめたら、皆様もついてきていただけると思えます。

例えば、次の場合、どう指導したらよいか、

1、人まねしかできない子ども、どうしてもひとりで描かない子ども

2、描けないと言って泣き出す子ども

3、きまった絵しか描かない子ども

4、おとなの絵でかたまってしまったもの

こんなことについて、どれでも一つ。

〔熊本〕 いつでも同じ絵しか描かない子どもは、これさえ描けば安心だという一種の逃避の形になります。私には飛行機がかかる、しかもほめられた場合、好きなものをかきなさい、と言えばそれを描きます。これは、これさえ食べれば中毒しないし銭がかからないという姿勢があるのです。こういう場合の指導は、頭からやっではないけなのです。またざるそば食べてるの？、また飛行機描いてるの？、と言われると、がっかりして食欲もなくなってしまう。いつも同じ飛行機を描いているうちに、逃避の姿勢は問題になります。中には飛行機が好きでたまらない場合もありま。そういう時は、変化があります。形が複雑になり、方向もいろいろな方向になります。好きで描いている子には、とめるよりその質をよく見るようにしましょう。前のチューリップより変化しているか、そのチューリップを、どういう所に咲いているようにしようか、その飛行機に乗ってどこかへ行ってみようという誘いかけ、そのようなことが大切だと思います。

〔林〕 どうしても描けない場合にどうするか。また、どうしても友だちの絵をみて模倣しやすい。これはつまり自分の絵を描くことがはっきりしていないからでしょう。友達に絵ばかり気になるというのは、自分より友達の方が上手だと思っているからであって、それはやはり、いろいろな面で先生やお母さんがたと関係があると思えます。

どうしても描かないという子どもというのは、いくつかの原因があります。生理的病気の場合もあるが、普通には、何か描きたくないことがあって描かない。例えば、誰かに笑われたとか、人から「お前さんの絵はへただね」などと言われたりする場合だと思われる。人間は誰でもすなおに伸びていけば、粘土でものをつくったり絵を描いたりするようになるのです。ですから、全然描かない子どもの場合は、何が原因なのかさぐるのがたいせつであります。しかし、これはたいへんむずかしいことです。私の友だちは、それをこんなふうに解決しました。即ち、かくようにかくように、と絵だけで解決しようとする、なかなか出来ない。どうしても絵をかかないから、何とかしてあの子どもがかいてくれるといいなあ、と思つて、きれいな絵の具と、思いっきりきれいな紙を与えたりしてもやはりかかないのです。ある時、その子どもと一しょに遊んでいて、足首を持ってさかさにつりあげたらゲラゲラ笑っている。私は「君はずいぶん乱暴なことをしたな」と言いましたけれど、その後、彼が絵をかくようになったのです。絵が解決するのではなく、肉肉全体で解決すると言えるのではないのでしょうか。例えば、運動会の絵をかかせる子どもが、「先生、走っているところはどうか

の」と聞く。そんな時、僕は「君、走ってきてごらん」と言います。また、フィンガーペインティングをさせる時、自分の手の上手をのせさせて「馬から落ちないようにしっかりとつかまっていなさい」と言います。ところが、手がすべり落ちてえのぐについてしまいました。ところが、これで絵をかくようになったのでした。どうしてもかかないひとりの子どもには、ミスショー先生のやりかたをそのまままねてみようと思ひまして、クレヨンをもって「先生は馬ですよ、バカバカ走るのではありませんか」と言いました。そして手を動かさないと、最初は不安そうだった子どもも、だんだんおもしろくなってきました。そこで「君ばかり乗ってはいけませんよ、先生も乗せてくれよ」と言つて子どもの手の上に私の手を乗せてみますと、その馬は動きませんでした。ミスショー先生のやりかたをそのまままねて私は成功したのでした。

〔津守〕 友だちの絵をみてまねてかくのは子どもにとつてあたりまえであるし、ある程度まねてかくのはいいんだということになるのではありませんか。

〔熊本〕 私は、まねていい場合もあるし、いけない場合もあると思います。原則的には、子どもの絵はまねをしない場合が多いです。子どもの絵画製作という活動は美術教育であるし、もっと広く解釈したいのです。生活全般にわたるものをどのように扱うかという問題になります。デザインはものに形を与えることですが、ものに形を与えるという活動はいっぱいあります。美術教育の中には、お手本通りにやる、まねなければならぬ、という活動はいくらでもあるのです。今日の絵は、訓練のための絵ではなく、自分の思うこ

とを表現させるのです。今まではこれが弱かったですね。民主的自主的な人間をつくるには、自分の意見が言えるように、それには、絵をかくということとは非常によいことだと思われれます。

それらが出てこない子どもが、まねをするという場合が多い。ただし違った角度からとりあげる時は、お互に協調していくというためもあります。が、基本的にはまねをしないですね。

〔林〕 私の考えもほとんど同じですね。子どもに絵を描かせたり作ったりする活動は、やはりそれ自体を目的にしている自己表現です。なるほど友だちの絵をみたりして覚えることもあります。が、両面を考えてみると、創造的な衝動をのばしていくことを目的としています。ただ私は、次のような失敗の経験をしています。「人まねをするな」ということに非常に神経質だったり、強く言いつぎたりした場合は、小学校一年生の子どもが動物園をかく時、どうしてもかきません。よく聞いてみると、最初は象をかこうと思つたが、クレヨンのはこをあけて隣りの人を見てみると、象をかいてた、人まねはいけないと思つて、こんどはトラをかこうとした、が、また隣りの人を見てみたら、隣りの人もトラを描いていた、これはいけない、今度はクジャクと思つて、ヒョイと前を見ると、前の子がクジャクをかいていた、そこでついにこの子どもはおてあげになつて、その時間何もかかなかつた、などという例があつたのです。日ごろ先生が「人まねをしてはいけない、人まねをしてはいけない」と言うので、それが響いたと思われれます。こうなると、まねをしないためには、子どもは五十種類の動物を知っていなければ創造的とは言えないのでしょうか。これは弊害になつた例ですが、基

本的には模倣させないようにしなければいけないと思います。

〔津守〕 隣りで子どもが絵をかいていると、ちょっとみえるからまねするのは、当り前ではないですか。

〔林〕 僕らから言わせると、隣りは何をやるものぞ」というところですよ。隣りがねずみを描いていようがクジャクをかいいていようが、問題ではないと思います。ざるそばを食べるといふ確信、ああうまい、と思ったり、自分がすっかりしたものをもつとか、こういうのはめんどうくさいものでなく、子どもが誰でももっているものをそのまま出しなさい、でいいわけです。

〔津守〕 根本的にはよくわかりますが、実際にかいているのを見ると、隣りの子をみながら全く同じのをかくのはむずかしい。皆どこから知らない間によってきて描いている時は勝手なものをかいていることも多いが、そうでない場合は隣りの子と同じような絵をかいている場合があります。ある程度隣りの子どもがかいている場合アイディアをとり入れるということもあるでしょう。それをみたら、その時の指導はどうしたらよいですか。

〔A〕 まねの問題ですが、私の考えでは生まれつき絵の上手下手があり、すらすらかける子と苦労してかけない子といます。こういうことを考えると、教育の先が暗くなるのですが、素質ということが大きく影響しているのではないですか。

〔熊本〕 模倣と創造の問題は大切でありますから、これについて考えたい。基本的には、林先生の考えに賛成です。

隣りの子どものまねをすることを分析してみると、好きな絵をかきなさい」と言うと、これは困るのです。隣りの子どもが飛行機を

かいているとヒコウキ、鯉のぼりをかいていると鯉のぼりとなってしまいます。これを予防するために、その子にしかかけないテーマを与える。あなたの一番うれしかったことをかきなさい」と、そうすれば、僕の嬉しかったことは何だったかな」と考えるわけです。

このように、題の出し方が工夫されるようになると、幼児において個人の経験を伸ばしていくことになります。アメリカで一ドルもらったら何に使い、日本で百円もらったら何を買いたいか、それぞれイメージが違ってくるのです。テーマ、例えば「さあこれから鯉のぼりを描こう」というと、全部が鯉のぼりをかきます。どこをまねするかというと、どの位置にどんな形でかくか、という構図とか形をまねするのです。自分にうまい考えがないと人のものを頂戴する。これは子どものみならず、おとなの世界でも人のをいただいてしまうことがあるのですから。わが国では、デザインというものに対する考え方がよくできていないので、人のものを頂戴するのに罪悪感が無い。やはり小さい時の姿勢というのは、ずっと後々まで大切なものでありますから、そういう時に、どの道にどのようにかかるか、ということ自分で何とか考えるような指導を、ということですね。

そのためには、やはり私は「観察」ということが大切だと思えます。鯉のぼりをかく、その場合に、やはり鯉のぼりをよくみてくるといふことですね。良くみてきて、自分なりにその鯉のぼりを感じてきて、そしてそういうものを描かせる、ということですよ。ある子どもは、赤いひごいに非常に興味をもつかもしれないし、ある子どもは、さおに、ある子どもは綱がひっぱられていること、など興

味の観点が違ふわけで、そういうもののいろいろな構図が型に表われてくるわけですね。ですから、みたものを客観的に描くのではなくて、みたもののどこに感じるか、というような感じ方です。これを指導の中にとりいれるというようなことが必要だと思われれます。

それから「色」であります。色というものは、割合まねしないものです。色彩感覚というものは先天的なもの強いと言われています。ですから、教師が「こういう色を使いなさい」と言えば、すぐその色を使いますが、ほっておけば自分の好きな色を使っています。しかし、その場合は、概念的な色です。空はそら色で、地面は茶色で、といったきまりきった色を使うということです。しかしそこは、そういう段階があってもいいと思います。だがやはり、自分のもっている色彩感覚が出るような指導というものが、何かの形でなされるのがいいのではないかと思います。

それから、結局じょうずな者はじょうずに、へたな者はへたなんだという考え方です。たしかにじょうずな子はどんだんアイディアも出し、型もじょうず、色もじょうずにぬれます。これがへたな子の場合、往々にして「おれはへただ」と思いこんでいるからへただという場合が多いのです。少なくとも幼児の段階では、専門家としようとの差はないのです。ですから、どの子にも、僕にも描けるんだ」という気持をもたせるような指導を考えることが、一番のポイントではないかと思えます。言いたりませんが……。

〔津守〕 今の素質の問題について……。これはいへんむずかしい問題で一概に言えませんが、現今の知識で言えば、素質——ある程度うけつぐ能力は、音楽的才能や数学的才能において

は、幼児期或るいは幼児期のごく初期から、天才はその能力を發揮します。それに比し、絵の方は、どちらかと言えば素質の面が少なくなるのではないのでしょうか。そして音楽なんかよりも、比較的環境的要素が多く働くのではないかと、どうもそんなふうな今のところ考えられるような気がするのですが。

〔B〕 津守先生が、僕は絵がへただった」とおっしゃいました。が、それはやはり、自分でへただと思っておかきにならなかった、というようなこともあるのではないのでしょうか。私もへただったのです。私の子どももへただったのです。子どもは幼稚園へ二年間通いましたが、ある時その幼稚園と私の勤めている幼稚園の両方が集って研究会をもちました。その時、「おたくの坊やの絵はどれですか」と聞かれ、むこうの幼稚園の先生が「先生の坊やのはこれこれですよ」とおっしゃった時、「へただね——」と皆さんがおっしゃったのです。たしかに、ずいぶんへただったのです。その本人は二年間通った幼稚園が終る時、僕は二番めにじょうずだ」というのです。級には紙芝居的なものや、自由画帖、粘土細工など、誰がみてもじょうずだと思われる子がいて、これをまず認め、二番目は僕だというわけで、劣等感などないですね。

〔林〕 素質がたいせつなのか環境なのか、ということですが、幼稚園でやっているようなことは、たぶん本能的なものです。手にも何もてば何か描けるのです。素質がなかったものでそのことはへただということにはならないのです。紙は抑圧を与えるなどということとは多分に環境論にかかっているのではないかと思います。意識的無意識的にかかわらず、素質でできるようなことをさせる、まあ

幼稚園ぐらゐのことは、どの子どもももっている本質論を求めればよいと思います。

〔C〕 幼児においては、発達の比較的早い子と遅い子と、器用な子と不器用な子があると思うので、これを一樣に評価して一枚に描かせようとすると問題があります。また、周囲の人の言動に注意すべきだと思えます。逆戻りになります。逆戻りになりませんが、ものまねのことに ついて。幼稚園の子どもは未分化ですから、人のいいところは見習つてのびていくのは必要でしょう。友と遊ぶ時は、人と一しょにということと同じです。作品をみたり、その子の家庭をみてプラスになるなら大いに認めてよいと思えます。例えば、他の子どもの絵で、白を入れたらうまく色が出たとか、水をつけてぼけたから、水を入れない方がよいというので自分はそうして、或るいはどうしてよいかわからない時、友だちからヒントを得てかきはじめた、こんなときは許されてよいのではありませんか。子どもの、主張していく面と、協力していく面の両方を認めたいと思えます。

△坂元▽ 次の問題で発言があったらどうぞ。

〔D〕 林、熊本先生におたずねしたい。絵に限って描けないとかいうときすぎますが、新しい素材方法を考えることによって絵も拡がるのではないですか。造形を、遊びに巾をひろげたいのですがどうですか。林先生が6月号にかけておられる「モダンテクニク」のこと、私は一辺倒ではなく両者合わせて行なっています。それで、両方ともある程度進んだと思っています。

〔熊本〕 モダンテクニクは林先生の方にゆずりまして、絵画製作の中で、私は、絵だけではだめだという考えの方です。しかし、

世間は広いし、それだけでたくさん、という人もいます。私どもの考えによれば、絵だけではだめな分野がある、例えば、重さとか、立体とか、空間とかいった立体質感は、平面的絵画ではどうしてもだめです。したがって、いろいろな新材料や方法を積極的にとり入れることは大賛成です。ただ気をつけるべきは、新しいことをやれば何でもよいだろう、流行にのれば……はまずいことです。やはり基本があつてその間にいろいろ新しいものが入ってくる、ということがオーソドックスだと思えます。終始一貫新しいものばかりで、何か曲芸的なことになつてしまつと、先生がくたびれてしまひますしね。一回一通りやるとたねがなくなつてしまつ、いつでも新しい出しものをやらなければならぬというのも考えものであります。でも、問題は、結局は新しいものを全然受けつけない先生もあるんです。また、新しいものをみると胃のぐあいが悪くなるといった体質的にそういう人がいるかもしれないですが、新しいものをとりいれようとする体質が、僕はやはり先生達の姿勢ではないかと思うのです。そういう意味で、新しい材料とか方法を無理のない形で、先生が興味をもつてあつてみるといのが基本線ではないかと思えます。

〔林〕 私もひと言お話しします。絵だけでは解決できないお話になさいましたから。

私の友人で絵をかかせていて、非常におもしろい、われわれのこゝとばで言うなら創造的なとりをかかせたり、創造的な動物をかかせたりしている人がございました。そういう時創造的な鳥を描かせるということとはなかなか出来にくい。相も変わらずヒヨコをかいたりす

るより手がないのですが、これを打開するのにどうしたらいいのか、なんていうことで彼が苦勞しましてね。自分の園の近くに鉄工所みたいなところがあり、そこでいろいろな廃材自転車のチューブみたいなもの、おかしな歯車みたいなものが出ますので、それで子どもにじゅうぶんに遊ばせました。チューブをまるめて、ある箇所を結んだり、ねじを使ったり、どこかに歯車をぶら下げたり、絵にもしたりしました。以来ふしぎな鳥やおもしろい動物を実際に描くようになったというのです。実におもしろい鳥や動物ができました。

だから、絵の世界の中で一生けんめい何とか解決しようとしているような問題ですが、広く造形全体の仕事をさせることによって解決が与えられると思います。実はこの協議に入る前に、私がここに入りましたら、スライドをやっておりましたね。それをみていて、ずいぶんいろいろな分野が展開されていると思いました。決して絵だけではなく、そしてまたカラーは実物よりきれいに出来ますから、ずいぶんびつくりして、これはすばらしいなあと思いました。6月号の最初に、ここにおられる坂元先生が、『何か非常に解放的な世界と、少し下の方には、何か目的があつて仕事をするとする両方の極がある、と考えていいのではないか』と書いていらつしやるけれど、私も賛成です。目的があるというとき、あれをつくらせようとかすぐ考えないで、子どもが自分の遊び道具をつくるとか遊ぶために何かつくるというふうなことを考えて、さきほどのスライドはでていると思います。広がりをもった造形活動をさせることが、幼児の創造的な造形力というものを伸ばすのに一番いいのではないか、という立場にたっているのです。

ついでに申し上げますが、僕は今日の実際指導を拝見してこういうふうに感じました。幼稚園の先生は、粘土なら粘土、或るいは絵を描くのなら絵を描く、或るいは今日はなかつたけれど版画なら版画といういろいろな分野の中で、それが一つだけのやり方をしているのではダメではないか、という感じですね。つまり僕は、いろいろなスポーツが好きですけれど、最近スポーツには連続技というものが非常に尊重されています。何か一つパンとやったのはだめで、左から右から、また右からもというような感じの連続技というのが非常にだじだと言われていますけれど、なるほど粘土をやつたら粘土から、今度、幼児がどういうふうに展開して、こうやつてこうなるという三つか四つの連続技を勉強しておく必要があるのですから、幼児のためのカリキュラムというものは、そういう連続技がずつと横に出ているものが生まれてくるのではないかな、ということをちょっと感じましたので、合わせてそれも話しておきます。

△坂元V 他にございませんでしょうか、どうぞ。

〔E〕 たいへんありふれたことですが、ぬりえは最近解消されていますが、それに似た形があつて、色をぬつたりするだけ、というのが保育社から売り出されていますが、手軽なのでどこでも使っていると思います。けれど、それはどうでしょうか、弊害になるか、それとも基礎としてやっていたためにプラスになるか、おききしたいのですが。

〔F〕 私どもの園だけでなく、たいいていの幼稚園では月刊雑誌をとつていて、それには必ずといっていいほど、大体行事的なものが入っています。私は、それを時には一斉にさせることがあります。

そしてそれを全く割りきってしまった、今度は身近にある牛乳のフタなどのいろいろな材料をおいておきまして使わせてみると、一斉指導のみからの影響はないような気がします。私は、時には、付録など全然なければよいというような気がすることもありますし、保育雑誌社ももっと考えてやってもらいたいと思うのです。六月はいつも時計でよし、子どもはきまってる線を切ったり描いたりして抵抗を感じず、安心して考えずにやっているか、でなければ、まねではなく似てはいるがそれぞれ自分が工夫してやっているようです。それがよいか悪いか、いかがでしょうか。

〔G〕 私十年前に幼稚園につとめましたが、当時、経験がないので、子どもたちに線をたどってハサミで切らせてみたのですが、四才の子も五才の子も、ハサミの操作が非常にまずいのに、何でこんなことをしなければならぬでしょうと思いました。線をきってたどるなどということは、容易ではないのです。ですから、小さい画用紙に描いたり切らせたりすることは弊害があると思うのです。線があると、自由にできることも出来なくなつて、ぬりえと同じようにまずい気がするのですが。

△坂元▽ 違った御意見のかたはいらっしゃいますか。

〔熊本〕 ぬりえ、ふろく、まんが、これらは私達はお手あげの感じですが、業者としてはやむを得ないものですね。結局、家庭で何も材料のない時に補助としてやむなく使うので、なにも幼稚園でそのようなものをやらなくてもよいと思います。

△坂元▽ 先月、中島ふく子という十二才の少女の絵の展覧会がありました。中島ふく子の絵はだいたいぬりえであり、大きな画面に

外の輪郭が一応描いてあり、それに色をはめていっていました。お母さまがそのような関係だと思いますが、この頃の絵かきがよくやるような技法でぬっています。顔などだんだらで色が外にはみだしているのもありました。そして、ぬりえでない製作も、ぬりえと同じ感覚でやっていました。それがすばらしいのです。昨日の谷田先生の論を思いだすと、ぬりえを粗雑に扱うことはいけなしいし、弊害も相当多い。本当にそうだと思いますが、結局、ある概略的なものの中にありながら自由をもつことも、われわれのねらいではないでしょうか。ですから、ぬりえというものも必ずしも悪くないという感じでした。

ある特殊な場合には、そういうことが発展のさまたげになつたりします。ただ、ぬりえの中にちぢこまってしまうのは、よくなく、ぬりえみたくなものの中でも、なお自分を自由に表現できるよくなるのがよいのではないかと、思います。私は、わくの中に描くのではなく、それがかごととなり、その肉づけとなって他の人におけるのだという、他の人への愛情の契機となつてもよいのではないかと、気がします。私が先ほど、目的的な計画的なことをすると、そういうものに伴う危険性を知らなければならぬと申しましたが、その危険性も避けてしまわずに、その中で自由に自分を表現していく創作活動をもりこむことがだいじだと思いがいかでしょうか。

〔熊本〕 少なくとも幼稚園での基本的なやり方は、自由にやるものが多いでしょう。クリスマス飾りをつくる時、星を作らせた場合、星は何角形でもよい、必ずしも五角形の星でなくてよいので

すが、例えば五角形の星をつくってもらいたい場合は、その五角形を教えてつくらせることもありませぬ。それは、大きなデザインとしての立場の中にはあると思われませぬ。例えば、ユニットのある家という同じものを作らせれば、団地ならA子もB子も団地らしいわくにはまった形があることはやむを得ないと思ひませぬ。禁止はいきすぎでありませぬ。造形という大きな活動のなかの一つのものに考えられる場合は、確率的な概念的なものを養われることもよいでしよ。しかし、そういうことは少なく、基本としてはやはり、絵画製作のねらいは自由にやらせることにあるのではないかと思ひませぬ。が、規格にはまったことが絶対にいけないとは言ひませぬ。

△坂元V あまり一つの事はやりやっていますのでもう一問題、指導の際の教師の位置についての御質問を二つよみあげませぬ。

1、絵画指導の時の教師の助言は必要か。

2、子どもの前で先生が絵を描くということはよくないと思ひませぬ、二十年間描きませぬでしたが、おたまじゃくしとお母さん蛙を描くことを余儀なくさせられ、四つ手を描いて自信たっぷりでしたが、ちょっと悪かったのではないかと思ひませぬ。如何でしよか。

〔熊本〕 最初の問題は、絵画指導の助言が必要かどうかということでしたが、おおいに必要だと思ひませぬ。肩を叩くだけで助言になることもありませぬが、おおくの場合、声をかけてやるだけで助言になることが多い。私の子どもも幼稚園に行っています、二年保育にまぎって委縮してしまつたらしく、こういう時、やはり先生が毎日声をかけてくれることがだいじだと思ひませぬ。こういうことを自

分の子どもで痛感してしまひましたが、絵の場合でも同じだと思ひませぬ。技巧的指導はいらないのです。ここは赤くぬりなさい、ここは黄色、この木は緑、この木にもつ枝をはやしなさいなどというよりも、これは何でしよ」というように、彼が表現しようとする内容を察知して、それが豊富に出るようになすこと、また、いつも課題を与えずに、子どもが自由に絵をかいているのなら理想ですが、そういうことは世界にまずないから、子どもたちが描きたいものを課題に与えることが必要だと思ひませぬ。従来の課題の与え方は、春は桜、五月は鯉のぼり、六月はつゆ、というように季節や行事を追うことが多かつたのですが、これは、根本的に考え直さねばならず、子どもたちの生活の中にある課題を与えることがよいと思ひませぬ。

先生が子どもの前で絵を描いて形を示す、ということですが、これはどうかな。昔はこれができないと先生にはなれませぬでしたが……。ところが、そういう一つの型にはまった絵がじようずだというのは好ましくないというのが最近の傾向であります。しかし、だからと言って先生が描いてはいけないということはありません。もう少し自由に考えて、自分が描きたくなつたり、子どもがどうして描いてくれといったら、描いてもよいと思ひませぬ。そして、先生の絵と子どもの絵は違ふのだから、あなた達は先生の絵をまねしてはいけません」と言つて、自由に筆をふるつたらよいのです。

〔林〕 結論的には、よいとも悪いとも言ひませぬと思ひませぬ。それは、先生と子どもとの結びつき、親と子どもとの結びつきがうまくいってればよい、それにつきますのです。例えば、お母さんが子ど

もと絵を描くことによつて、子どもがいつも、親はすごい権威者で屈服していなければならぬと思つてゐるのでは困ります。新しい先生が園児にぶつつかつた場合、子どもは非常に警戒します。こういう時に何か言つたりすると大きくひびきますが、もっと柔らかな雰囲気の中ならばよいのです。何しろ、先生と子どもとの結びつきで、この問題は解決できると思ひます。

〔津守〕 一つ気がついたことですが、付属幼稚園の保育をみておりますと、先生が子どもの中に入り、それによつて子どもにその関心をそそることが多いように感じます。絵ではありませんが、先生が何かつくつてゐると子どもがそれをみて、何つくつてゐるの？と言つて自分もやりはじめ、先生がつくる、描くといふことは、先生が子どもに対して意欲を感じさせるといふ意味でよいと思ひます。先生が簡単なものをつくつてみせると、三才児は、先生だつたらもつともまく作ると思つていたのに何だ、それでいいのか、という気持ちになつて粘土の家をつくりだす。先生が自分の絵をかくのではなくて、子どもに合せて作つたり描いたりするのは、子どもにその気持ちをおこさせるという意味ではないでしょうか。

△坂元V 週の中に六領域、特に絵画製作の時間をどれくらい入れたらよいか。小学校の時間割と同じではないといふことはよくわかつておりますが、という問題が出されておりますが、これに關係した御意見をどうぞ。

〔津守〕 この問題に直接お答えする前に間接的ですが、絵画製作をいかに考えるかという問題の方がたいせつだと思つたのですが、絵をかいてほしいといふことを母親が強く思ふ場合、子どもがろくな

絵をかいてこない、なぜこんなにへたなんだろうと思ふ。そして園のおへやに来て自分の子どもはどんな絵を描いたのだろうと、あんなどんな絵を描いたの、へたね など、よその子どもの絵は何もみないで自分の子どもだけをみて批評をしたりします。それを考えると、先生も、子どもによい絵を描いてもらわなければすまないような気がしてしまうことがあるのではないのでしょうか。これを理論的に考えると、はじめに指摘したように、現代の風潮であるところの小学校や中学校・高校からよい大学・就職というふうな連続目的につながるためであります。そのような考えが、あなたはなんでもんな絵をかくの、ひとはあんなにかいてゐるのに、などといふことになりまふ。こういう人達は、小学校に入るといつのまにか絵のことは忘れて他の勉強の点数にとらわれてしまふのです。われわれはそれを意識しておくことは必要です。幼稚園においては母親の力は、目にも見えるものであるところの絵にかかつてくるので、絵をとくに描かせる時間をとり指導してゐないと、いったい何をしたいのかといふ疑問をもつてくるのです。しかしわれわれが絵を考えたい場合、小学校や中学校の学力に匹敵するものではなくて、絵そのものをみていくのであります。幼稚園における絵は、幼稚園の生活全体の中でのバランスを考えてみるべきであります。母親の圧力などを考えるのがよいのであります。これが基本的なことでありまふ。

△坂元V 小学校においては御承知のように音楽図工は一年生では三時間、二年生以上は二時間、算数は、何時間、というようにきまつてゐるので、六領域もそれとつながつてゐるような感じをおもち

になっていらっしやるのではないでしょうか。六領域が、一週間に何時間何分、というふうにはまっていけないと、教育していかないのではないか、というふうないうひとがよくあるが、これは根本の問題です。領域を小学校の教科と同一視するのはまちがいです。

例えば、絵画製作とか音楽リズムは、そこからみても絵画製作とか音楽リズムだということがはっきりわかりますね。ところが、そうでないものもたくさんあるのです。社会とか健康に属する活動ははっきり外に出ないので、外からみれば絵画であっても、中からみると健康とか社会が入っているのでありまして、外からみた活動が何時間何分ということはナンセンスです。全体としての目標にバランスがとれているということのみ考えればよいのであります。絵画製作などは外からみえる活動として多いだろうと思いますが、それを通じて他の目標に到達するようになっていく場合が多いのです。

では時間もせまりましたので、ひと口ずつ先生に言っていたかどうかと思います。

〔林〕 きょうはいろいろな問題が出ましたが解決はなかなかむずかしいですね。というのは、教育はこれだ、というものがないからであります。私は、最初にしいな町ということばについて子どもはおもしろい考えをもっていることを言いました。実は少し前、古い本を買いました。自由画教育を広めた山本鼎の「児童と図画」です、大正八年に出た本ですから、ずいぶん古いのですが、読んでみると、こんな話が出ています。「アメリカの大使館に赴任してきた或る人が、横浜の港についた時、今まで晴れていた空が急に曇って雨が降ってきた。すると、その人の子どもは、太陽がアメリカに帰っち

やった、と言ったということが新聞に書いてある。このチャートミングな自然観は育てるべきで、それをあわてて訂正するようなバカはいない。訂正することがなくては教師はいらないということ、叱ることのない巡査が心細がっているようなものだ、”と言っています。その時から約40年たった今日、皆さんと絵画製作について論議しているのですが、いろいろな問題が出たように、その間ずいぶん進歩しているようであります。しかし、見ようによっては、少しも進歩していないともみられるのです。しかし、ここでもり上げられた努力は認められてもよいはずであります。いうなれば、幼稚園の絵画製作はむずかしいということでもあります。一時、折り紙やぬりえの時代がありました。ぬりえの害が叫ばれた時もありました。しかし、子どもの造形活動全体の中には、ぬりえや折り紙の活動はずい所にあつて、これが必要であるという考え方もあり、このようなことは今日まで続いています。がもはや、このようなことは卒業にきている段階ではないでしょうか。皆さん、らせん階段をみたことがあると思いますが、らせん階段で頂上近くの人が、富士山が見える”と言うと、三段めぐらいの人もやはり、富士山が見える”と言う。それなら君と僕とは同じだね”などということになります。ぬりえはよいと思っている人もあります。例えば、ぬりえがよい、おりがみもよいとやっている人がいる。今度、ぬりえ・色紙が悪いというのではなく造形活動の中に新しい角度から解決しようという時に、最初から折り紙をしていなかった人が、それみろという態度でやっているなどということをよくないですね。人々にはいろいろの層があつて、もうぬりえや折り紙を卒業している人もありま

す。勉強もしないでだまって座ってれば、世の中はまたもどつてくるなどと考えない方がよいと思います。

〔H〕 今日・昨日の研究会を通じて、結果として、次のようなことを考えてよいでしょうか。幼児の絵画製作指導は、結局、幼児の心に安定を与えるのでよいのではないだろうかということ。そのためには家庭にあつては母親を中心とした環境はもちろん、園においては教師相互の均衡を保つことが必要であると思いますが、それに対して、この幼稚園では先生がたの精神衛生についてどういうお心やりをもつていらつしやるでしょうか。

△坂元 V 最初におつしやつたことは、H先生がそう思つてお帰りになるのはさしつかえないと思います。それでつきているとも思わないし、また全部がそれではいけないとも思いません。後者の御質問に対しては、たいへんありがたいことに何もしてないというのが現状です。では次の先生どうぞ。

〔熊本〕 最後に一つ。幼稚園でやっている絵画製作が将来、どういふ点につながっているかを知っているかを知っていただきたいのでちょっとお話ししたいと思います。小学校へいくと、いわゆる図画工作になり、一年が三時間、二年が二時間、八教科の中の一つとしてやっています。中学にまいりますと、技術と美術にわかれ、美術は一年は二時間、二、三年は一時間と決められ、技術は各三時間と決められています。高校にまいりますと、美術工芸が選択二単位となっています。大学では、それぞれ専門の学校でしかやらなくなります。最近の風潮として、デザインがやかましくとりあげられますが、これはいわゆる絵画製作でなく、生活環境を具体的によく

していくという、そういう意味のものとなっています。われわれの中では、デザインができるのがお嫁にいく資格ではないかと考えている人もいます。あらゆる人にデザインが必要である、つまり幼児の段階で行なわれる絵画製作は、将来、人間の生活に具体的考えをあらわし、問題を処理していくもの根本である故、諸先生に期待いたします。なお、最近の外国の例では、科学技術と信仰が叫ばれ、中学ではとくに総合美術教育がとりあげられ、ソ連やチェコなどでも型にはまった技術教育ではだめである、もっと主体的美術的要素をとりいれないとだめだということが反省されています。ドイツやアメリカでは、まだその段階に入っていないのではないかと思われますが、日本はまだその一步後の段階にあると思います。広い意味の造形は、子どもの心にもたいせつであります。

〔津守〕 絵画製作は幼稚園生活の素材としていいじなものです。社会性を養う素材であり、言語性を養う素材、また、創造力を養う素材、工夫力を養う素材であります。幼児の教育全体に目を向けるならば、このようにいろいろな素材となっています。ただ描かせるため、作らせるためだけに目的にしてやるものではありません。それだけでは価値がなくなるのではないのでしょうか。そこで、絵画製作をしながらそれに一生けんめい打ちこんで新しい考えを出し、打ちこんで考え、作っていく力・態度というのが、後になつていろいろな方面でのびるのではないかと思ひます。

（六月四日 第十四回教育実際指導研究会 より）